

氏名（本籍）	カ トウ マスエ 加 藤 磨珠枝（愛知県）
学位の種類	博 士 （美 術）
学位記番号	博 美 第 80 号
学位授与年月日	平成12年 3 月 24日
学位論文等題目	〈論文〉ローマのサン・クリソーゴノ聖堂初期中世壁画研究
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 越 宏 一
（論文第1副査）	“ “ “ “ “ “ 佐々木 英 也
（副査）	“ “ “ “ “ “ 海老根 聰 郎
（ “ ）	金沢美術工芸大学 “ “ “ “ “ “ 辻 成 史
（ “ ）	跡見学園女子大学 “ “ “ “ “ “ 福 部 信 敏
（ “ ）	立 教 大 学 “ “ “ “ “ “ 名 取 四 郎

（論文内容の要旨）

ローマのサン・クリソーゴノ聖堂の地下バシリカに現存する初期中世の壁画は、ローマ教皇グレゴリウス三世（在位731-741年）の発注によることが古文獻によって知られ、制作年代と注文主が確かな初期中世の作品として貴重である。しかし現在ではバシリカの身廊左壁とクリュプタの一部および副祭壇周辺に壁画が現存するのみで、しかもそれらはあまりに断片的であるためか、これまで詳細な研究はなされなかった。本論文は、著者が1993~1997年に行った現地調査に基づき、サン・クリソーゴノ聖堂の初期中世壁画の総合的研究を目指したものである。

「序論」において著者は次の点を指摘する。初期中世ローマの美術に関しては、これまでビザンティン美術の地方版という意識が研究者に根強く、本壁画についても保存状態が良好な聖人像の様式比較を中心に、東方起源の美術の地方版という偏った評価がなされたに過ぎなかった。こうした状況を踏まえ、本論文では初期中世ローマの絵画をむしろ初期キリスト教美術の継承として捉えようとする。これと共に本論文の基本方針は、現存するサン・クリソーゴノ聖堂壁画を孤立的な断片として扱うのではなく、聖堂内の装飾体系という全体的視点から考察を行うことである。

第一章「建築と壁画の現状」では、聖堂内に現存する壁画の即物的観察をもとに、これまで見過ごされてきた壁画断片の再評価が行われ、その結果、まずクリュプタにおいてはこれまで三聖人の肖像と記述されてきた壁画が、聖遺物を拝する窓の前に配された五人の聖人画として新たな姿を表すことになった。身廊左壁については説話場面の残存状態の記述が行われ、またメダイオン装飾については男女混合の聖人から構成される図像学上の特色が強調されている。さらに副祭壇についても残された遺構から復元作業が行われ、聖堂内に新設された聖遺物を祀る祭壇の視覚的重要性に光が当てられている。こうして、当時の聖遺物信仰をめぐる壁画装飾プログラムの考察に多くの手がかりが得られた。

第二章「クリュプタの聖人像」では、図像プログラムの解釈が行われている。まず二つの聖人グループの表現方式の違いに注目することにより、一方の説話性を表す聖人像の起源を初期キリスト教時代に求め、他方の正面観で時間性を排した聖女像を初期中世に発展するタイプと規定し、異なる二つの肖像タイプの混在という視点から解き明かそうとする。また参拝用窓の両脇に配された二人の人物像については、足許に僅かに残る銘“IEZIA”を手がかりに、窓の左右に向かい合う人物像が表された関連作品と比較を行った結果、彼らは預言者である可能性が高いことが判明した。初期中世のローマで「キリストの受難」の典礼式文に章句が採用された預言者イザヤとエレミヤは、すでにラヴェンナの殉教者記念堂、サン・ヴィターレ聖堂で「キリストの受難を告知する者」として、プレスビテリウムの主祭壇をはさんで向かい合う南北両壁に登場している。この先行例およびカロリング朝のトリアーのザンクト・マクシミン聖堂クリュプタとの類似性から、殉教聖人の聖遺物を祀ったサン・クリソーゴノ聖堂のクリュプタにも同様の内容が込められていたのではないかと推論される。

第三章「メダイオン装飾の系譜」では、身廊左壁に残る殉教聖人のメダイオン・サイクルについて、その形式、および、図像プログラムの観点から考察が行われる。ローマで確認される最古の現存例である、この殉教聖人メダイオンのプロトタイプは、6世紀にはローマの聖堂内装飾に導入されていたと考えられるが、現在ではその作例は総て失われた。こうして、孤立的に見えたサン・クリソーゴノ聖堂のメダイオン・サイクルは、ローマで発展した聖堂内装飾の伝統の中に位置付けられ、同時に、初期キリスト教時代には非自律的であった殉教聖人メダイオンが、700年頃を境として次第に孤立した要素として発展していくプロセスが浮き彫りになった。

第四章「キリスト伝サイクル」では、身廊左壁に残る二つのキリスト伝場面「カナの婚宴」と「冥府降下」の場面選択の問題を出発点に、その新約サイクル全体の復元がなされた。その結果、サン・クリソーゴノ聖堂と密接な関連を示すローマのサン・クレメンテ聖堂壁画との比較から、前者の新約サイクルが「キリストの受難および復活」に「カナの婚宴」という典礼的図像を附加したものであるという結論が得られた。また、この章では、旧サン・ピエトロ大聖堂を飾った新約サイクルとサン・クリソーゴノ聖堂との関係についても触れられている。

第五章「壁面装飾体系」では、身廊左壁の壁画は初期キリスト教時代の伝統的なバシリカ装飾の形式を踏襲しながらも、その装飾体系に「アイコン画」という独自の礼拝機能を組み込んだ画期的試みであることが指摘されている。しかも、この典礼プログラムは、サン・クリソーゴノ聖堂内で行われたミサの聖務内容（これは歴史資料から復元可能）および残された奉納銘文によって、当時、教皇グレゴリウス三世が確立した典礼制度により普及した、殉教聖人の墓前で捧げられる典礼に対応したものであった。結局、サン・クリソーゴノ聖堂の装飾プログラムは、聖遺物を祀る祭壇で行われる典礼による聖体の秘蹟と、その神秘を介して教皇が祈願した、自らの魂の贖罪という点に最大の特色が見出されるのである。

「結論」では、サン・クリソーゴノ聖堂壁画の初期キリスト教美術との結びつき、および後続の西欧中世美術の準備段階としての重要性がまとめられている。端的に言えば、この初期中世壁画は制作された当時の、熱狂的な殉教聖人崇拜を背景とした、聖遺物を祀る祭壇周辺で形成されたプログラムとして革新的な内容をもつものである。